

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 (財)第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区
夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

つい数日前も、二人連れの男子高校生がやってきた。二人の編集部来訪はこれが三度目だったが、その一人、Q君の話には、この日も、驚きを通り越して、すっかり考え込まされてしまった。

Q君は、男の子だが、ダイエットをやっているのだという。しかも、すさまじい徹底ぶりなのだ。

いま、大人たちもそうだが、子供たち、高校生たちもまた、先の見えない激烈な競争社会を生きている。G県では受験勉強で「過労死」した高校生が出たという話を最近聞いた。

(高文研・編集者)

第五福竜丸展示館のポスターを私たちに紹介したら、とてもいい反応があった。『「あちこちの高校からポスターの申し込みが相ついで」と、事務局の方からうれしい報告を聞いた。』

まじい徹底ぶりなのだ。まず朝食は、小さな茶碗にご飯をごく少量、次の昼食は「抜く」か、自分で作った野菜だけの弁当を食べる。たまに友達とバイキングでムチャ食いをしてしまう。家族には内緒だが、浣腸も自分でやっているという。

昨年、全国「倫理」「現代社会」研究会の先生たちが全国の高校生を対象に調査したデータによれば「学校を休みたいと思う」「できれば他の学校に変わりたい」「学校の競争に疲れを感じる」という高校生は合わせて五七%、また「日本の将来を色で表すとしたら何色？」の問いに対し、「灰色」「黒」と答えた高校生は合計五五%にのぼる。

金子 さとみ

風が吹き抜けていくようなメッセージを

☆

を切りさいなんでいるような気がする。

「死の灰」前に思いを語って

第五福竜丸乗組員展示館を訪問

一月二十九日、第五福竜丸乗組員の齋藤明さん、小塚博さん、大石又七さんがつれだって展示館を訪問、折から録画撮影中の「NHKスペシャル」スタッフの取材を受けました。



展示館のノートにひとことをする齋藤明さん

一年程前「父が名前を書いてくれた思い出の道具箱です」と、海のおいしみのみ込んだ、釣り針、擬似餌などを入れたがっしりした小箱を寄贈して下さった小塚さんは、他の乗組員の日用品とともに展示されているケースの前で、まぐろの漁の様子を身体いっぱい語りました。

に痛かったなあ」と隣の大石さんに語りかけました。三十八年の星霜を刻み込んだ傷だらけの船腹、八名の乗組員がいまは亡く、いまなお放射能の残る「死の灰」を前に言葉も途切れがちでした。

帰りぎわ展示館の片隅の来館者ノートに鉛筆でそれぞれひとことが書き記されました。「十年ぶりの福竜丸再会に感激しました」「ご丁寧な管理をいただきまして感謝いたします」「平和へのあかし、大切にしていきたい」。

外交文書の学習会

一月二十九日夕方、学生会館でビキニ事件に関する外交文書の学習研究会が開かれました。次回は二月十九日(水)午後五時半から本郷の学生会分館で開かれます。

感想ノートから

「焼津の三・一ビキニデーに参加して以来の念願がかないました。足を踏み入れたとき眼前の大きな船体と大書された文字にどきどきしてしまいました。知らなかったのは以前ごみの島だった夢の島に捨てられていたということ。なんというところでしよう。保存運動を続け実現したこと。貴重なことです。再び考え見つめ直したい。堺市・学生」。

来館者とともに見学の感想も

新しい年を迎え、一月の来館者は、七〇団体一万七千名。春の修学旅行の申し込みもいっばいです。来館者が多くなると共に、パンフレットの注文、資料の問い合わせ、ポスターの申し込み、見学の感想などがたくさん寄せられます。ポスターを送ってください。

キ、湾岸戦争など。今回第五福竜丸のポスターのことが目にとまり早速申込みをすることが決まりました。弘前学院聖愛高等学校社会部。映画『第五福竜丸』ありがとう。先日は見学させていただいた上、ビデオをありがとうございました。社会科の授業として映画を見せていただきました。長時間ですし四年生には少しむづかしいかなと思ふ部分もみんまよく集中して観賞することができました。私も涙がとまりませんでした。学生時代に見たのですが今理解できることも多く、家でも家族全員で見せてい

ビキニの海は忘れない④

沖縄の放射能雨

山下正寿



沖縄にて

幡多セミの高校生たちと元マゴロ漁民に聞き取りを続けるなかで放射能雨と漁民の関係が判明してきた。

まず、遠洋漁業では水が不足するためスコールを待っていた。スコールが来る時は遠くから近づいてくるために、皆で裸の体に石

験をぬってデッキの上で待っていた。又、スコールを陽よけテントで集め、衣類・食器や顔を洗うために使い、時には飲料水としても使用していた。つまり、ビキニ海域に近いために最初にふる雨(スコール)程、放射能濃度が高いこと、さらに放射能雨に体をさらし、皮膚や口から体内被ばくする最悪の条件下におかれていた。

ビキニ水爆実験による放射能雨検知記録は、同年五月十六日(二十八日)までをピークに京都で八万六千カウントを最高値にいつれの地域でも日本の観測史上最高値を記録していた。中央気象台では、五月五日の第五回水爆実験(一三・五メガトン)で吹き上げられた死の灰が四〇〇〜五〇〇m以下の下層大気の直接的な汚染によるものと分析している。

日本本土よりさらにビキニに近い沖縄やグアムさらにマニラ海域の汚染ははるかに高いことが予想される。私たちは沖縄に注目した。一つは多量の放射能汚染マゴロが沖縄近海でとれているのに、

沖縄のマゴロ船には何の異常も記録されていないこと。一つは、核実験を実施したアメリカが支配した沖縄でどのような対応がされたのか——に深い関心を持った。私たちは、事前調査を含めてビキニ調査のために四度沖縄に渡った。沖縄はいつも強い陽さしの下、調査で歩く路面は深い影が刻まれていた。那覇・糸満を中心に、沖縄県平和委員会の方々の協力を得て調査が続けられた。

その結果、琉球水産所属のマゴロ漁船「銀嶺丸」(一五二ト)大鵬丸(一五二ト)の存在を確認した。この二隻は、フィリピン、ニューギニア近海を中心に漁しており、那覇港でアメリカ軍による放射能汚染検査を受けているが、その結果は「大丈夫」ということになっている。

二隻の乗組員六十八人のうち十七人が四十年代半ばから五十年代にかけて死亡、死因は十一人がガンであることが沖縄県平和委員会の追跡調査で判明した。私たちは沖縄の放射能雨に関して那覇気象研究所と県立図書館を中心に独自調査を進めた結果、意外な事実を発見した。

五月十九日付、沖縄タイムスは「住民の不安除け」と前日の沖縄議会審議の報告をしている。この中で、社会局課長が質問議員に対し「政府(沖縄民政府)にガイガー計数器がない。軍公衆衛生部とも連絡して早急に調査を行いたい」と答弁している。沖縄では、放射能雨のピーク時期に検査体制すら確立されていなかった。六月七日になって、天水の放射能検査が那覇の三ヶ所で行われ、十五カウントで「天水もまず心配なし」「検査」は単に沖縄住民だけの問題でなく駐留米兵にも関することであり、軍民協力によって保健問題を解決する必要があるからである」と米軍中佐の所見も発表されている(琉球新報六月八日付)。

当時、沖縄住民の八割、九割は天水を利用しており、駐留米兵は水道水を利用していた。米軍の検査はビキニ被災の実態から見て不自然な結果となっている。沖縄県民は、放射能をおびた雨と魚によって島ぐるみビキニ被災を受けた可能性もある。追跡調査が急がれている。(高知県、ビキニ被災調査団員)

さい果ての島の被ばく者たち

北方四島取材印象記

上野敏彦

昨年春、北方領土へ入り、国後、歯舞、色丹、択捉の四島を十七日間取材して歩いてきた。ゴルバチョフ大統領「当時」が四月に来日した時、領土返還問題が大きくクローズアップされた割には、肝心の四島の現状が知られていないと思っただけである。

北海道知床半島からわずか二十数キロ先の国後島へ渡るのに途中サハリンで一週間吹雪に閉じ込められたため成田を出発してから十日もかかってしまった。ようやく訪れた国後の中心地、古釜布の町は木造住宅に木製の電柱が立ち並び、凹凸道路ではニワトリや牛が散歩するという昭和三十年代の日本の風景そのもの。早朝から深夜までさまざまな人に出会い、ウォークで乾杯しながら色々な話を聞いた。四島返還をどう考えるか。島での生きがいは何かーなど。ソ連がかつて日本人島民を四島から追い出したのは間違いだった。で

も今、島を返せばその悲劇を私たちが繰り返すことになる。日本人が島へ来るなら歓迎する」という声が圧倒的に多かった。

四島島民の平均年齢は約四十七歳。へき地勤務手当がつきモスクワの二・八倍もの収入があるため大陸からの移住者が多いのだ。しかし、出稼ぎ目的でなく、深刻な事情を抱え四島へ移り住んだ人たちもいるのである。チェルノブイリの被ばく者たちで歯舞を除く各島に教家族づつが生活していた。

古釜布で「国境にて」新聞編集長を務めるセルゲイさん(三九)もその一人。妻のスペタラーナさん(三三)の誕生日パーティーに招待してもらった。一九八六年四月二十六日、チェルノブイリの事故が起きた当時、セルゲイさん一家は北へ約六十キロ離れたブラーギン市で生活していた。夫妻には長男のグレブ君(八つ)とスペタラーナさんのお腹にエレナちゃん(四

つ)がいた。

事故後、三人の体からは放射性物質が検出され、じん機能低下のほかセキが止まらないなどの症状も続いた。一家の健康状態を診断した医師は、空気がキレイで、クマリアという放射線障害に効果のある海産物が採れる千島へ転地療養をすすめたのだという。

八八年春、国後で一家そろっての新しい生活がスタート。「島内にはバスも電車も走らない。ただぬかるみの道があるだけ。最初は恐いところへ来てしまったと思っただけ、じつくりと暮してみると自然は美しいし、家族皆が丈夫になったので今はとても幸せ」。スペタラーナさんは三歳になってようやく髪が生えるようになり今ではリボンも結べるようになったエレナちゃんを膝に抱きながら満足そうだった。

色丹島・穴瀬小中学校の校長ロジーナ・パリーナさん(四〇)もチェルノブイリの犠牲者の一人だ。両親と兄が白ロシアで被ばくしたため、色丹から看護に出向き逆に自分も放射能を浴びてしまったという。甲状腺肥大に悩まされ八七年九月に手術を受けた。以後毎年キエフ

で血液検査を受けているが、海草をよく食べるため体調はいいという。ロジーナ校長の学校では、隣国である日本が大好きという子どもたちから逆に質問攻めにあった。

「返還問題に対するあなた自身の考えを聞かせて下さい。この島はぼくたちにとっても生まれ故郷なのです」。教室で二十人ほどの生徒が私の目を真つすぐに見詰めてくる。「日本では借家に住んでる人でも一方的に家から追い出されることはありません。皆さんが今ここに住んでいるという現実を日本政府も重視しなければならぬと思います」と答えたのだが、生徒たちの表情が一瞬ごんだことを昨日のように覚えている。

あれから八カ月。チェルノブイリの家族や島の子どもたちはどうしているのだろうか。ソ連は崩壊し、その混乱は四島にも及んでいくことだろう。領土問題の先行きは不透明だが、日本政府も四島返還をスローガンのように叫んでいるだけではダメだ。返還が実現した場合、旧ソ連人島民たちのために何をすべきか、私はその青写真を描く作業こそが急務であると思う。(ジャーナリスト)